

指導・支援・ケア つながって生きることを意味を問う

愛知教育大学名誉教授 折出 健二

折出健二（おりで けんじ）

1948 年、広島市生まれ。広島大学大学院教育学研究科修了。愛知教育大学教授・副学長を経て、同名誉教授。現在、人間環境大学看護学部で教職科目担当(非常勤)。日本生活指導学会代表理事、日本教育方法学会理事他。専攻は教育方法学・生活指導論。

主著:『変革期の教育と弁証法』『人間的自立の教育実践学』『対話的生き方を育てる教育の弁証法』(以上、創風社)。『生活指導とは何か』(竹内常一氏との共編著、高文研)。『自立支援とは何だろう?』(日本生活指導学会編、終章を担当、高文研) 他。

I コロナ禍の学校教育と子どもたち

1 コロナ禍と向き合う子どもたち

よろしくお祈りします。皆さん、はじめまして。今、春日井先生からご紹介いただきました折出です。今回は実践教育学会の貴重な場を頂きまして、ありがとうございます。非常にタイムリーなテーマと向き合うことになりまして、私も大変勉強する機会になって、感謝しています。早速ですが、限られた時間ですので、話をしていきます。

短い時間の中に、前半と後半を第 I 部と第 II 部に分けまして、少し大げさに受け止められたかもしれませんが、論点の組み立て方がそのようになっています。後半のほうに力点を置きたいと思っておりますが、お手元に資料をお持ちであると伺いましたので、少しスライドを、手早く話をしていくという場面もあるかと思っておりますが、よろしくお祈りします。

まず、そもそも今回のタイトルにも上がっている、コロナ禍とは何ぞやということですが、私なりに、これからアプローチしていく視点を、先に述べておきます。新型コロナウイルスの感染のリスクが高まる中で、今は多少減少してきてい

るとはいえ、依然として3密回避などの、日常的な社会関係を抑制する行動の制約、そしてそれに伴う心理的な狭苦しさというものがあきまして、これらをひっくるめたものとして押さえておきます。

もっとずばり本質的にいえば、コロナ感染の病理的なリスクと、それから、それによって生じている関係性の不安定さ、不確かさ、これをどのように生きるかという難問に向き合っている、そのような私たちの現実のことではないかと思っております。ですから、どのようにつながるか、あるいはつながることができるのかというのは、その難問を、私たちが孤立しないで、少しでも小さな協働関係、あるいは共に生きる関係をつくり直しながら読み解いていく、そして実践していくことになると思っております。

まずは、コロナ禍の学校教育の問題を述べます。ちょうど昨年からのコロナ禍のもとで、これからの学校教育をどのように構想するかということで、中央教育審議会の答申がまとめられました。皆さまも、おおよそのことはご存じかと思っております。ここでは、このコロナ禍によって浮上した学校教育

の役割や、あるいは子どもにとっての学校というものが、うまくまとめられてはいると思います。今日は、その中にはいちいち入りません。

ただ、私も、この答申を全部拝見しまして、一番の前提、つまり昨年の一斉休校も含めまして、やはり国の、この学校教育への関わり方として、コロナ禍の中で、子どもたちの学習権を脅かす、あるいは学校生活と向き合う子どもたちの希望や、小さな未来に対する意欲というものを脅かす、そのような場面が、確かにあったわけですから、そのことに対する、審議会としてのきちんとした反省というものも要るのではないかと思います。

では、そのような子どもたちの実態はどうかということを知る上で、非常に参考になります調査があります。国立成育医療センターが行った昨年度の調査ですけれども、これも資料に入れておきましたので、あとで詳しくご覧ください。私がここに上げました7枚のスライドでお伝えしたいことは、要するに、まずは、子どもたちはコロナというものを悪いものとして刻みつけるような、そのようなスティグマにあるのではないかとということがうかがえるということ、それから、コロナによって周りにいじめられている、あるいは自分もいじめられている、それから周りにいじめられている友達がいるということも、数はそう多くはないけれども、やはり実態として挙がっています。

勉強のことや友達関係のこと、そして家族のこと、いずれも相談できるのは、左から2つ目の淡いグレーのところですが、友達の割合が、年齢が上になるほど割合が多くなっているということは、とても大事な点だと思います。

しかしながら、右から2つ目の、淡いブラウン、そこにありますように、「相談できる人がいない」と答えている子どもも、この思春期の年齢にかなりいるということ、ここはやはり、私たちはしっかりと見ていく必要があると思います。特に、自分の心や気持ちのことについて、なかなか相談できる人がいない、そのような、身近にいて自分のことを分かってくれる他者との、まさにつながりが非常に薄い、弱い、そのような子どもたちが現にいるということです。

2 インターネットと子どもたち

それから、コロナのもとで、メディアのいう「巣ごもり」状態が続く中で、インターネットを通じて出会い系やその他にアクセスする頻度は増えているけれども、逆に、それだけ犯罪に巻き込まれるリスクも増しているという現実があります。

ネットには、ネット特有の **buzzing** という現象があります。ハチが群れるように、ある話題に集中して、ないしは、ある特定の人の話題を取り上げて、そこに集中して、結果的に攻撃的な現象を引き起こしてしまう、これがインターネットの特有の構造なのです。

そして、そのような問題も含めて、インターネットの分野にお詳しい宮崎氏は、学校教育の中での大事な点を挙げています。その1つ目が、文字コミュニケーションへの対応の問題です。特にネット上での文字というのは、その表現自体が、読むほうにとって非常に厳しいものとして受け止められる可能性がある。それから、書き込むほうも、相手の顔が見えないために、ダメージを知ることができない。そのような特性は、やはり文字コミュニケーションの問題として学習しておく必要があるのではないのでしょうか。

それから、クリティカルシンキングの導入や、過剰な情報を受け止めることに対する対応も、やはり学校教育の中で子どもたちと学び合う必要があるのではないかとこの貴重なご提言だと思います。

3 貧困と孤立の実態把握と学校への期待

また、社会学の山野則子氏は、貧困と孤立の現実の中で、やはり学校がそれらの実態を、より身近につかみ得るプラットフォーム的な役割を果たせる、そのような立場にあるので、教員だけでは、もちろん今の多忙化問題等を含めて難しいので、そのための新たな専門的人材を登用することも含めて、そのような学校の機能の一層の充実をということを提言されています。

要するに、中教審の答申もいっていますけれども、「つながることによる心のケア」や、「子どもたちの居場所」というものをどのように保障していくかということが、この2020年から現在に至

るまでの中で、全国のあちこちで、非常にはつきりと浮かび上がってきた。このことが確認できるのではないのでしょうか。ケア、あるいは子どもたち同士のつながり合う機会の保障、一人一人の子どもにとっての居場所、そのようなものを引き受けていく学校の在り方というものが、今は問われていると思います。

学校の福祉的役割と居場所機能

- ◆「新型コロナウイルス感染症の感染拡大により浮き彫りとなった課題」として中教審答申（前掲）は、次のことをあげている。
 - ・「子供たちや保護者とながらることによる心のケア」や「教科書や紙の教材、テレビ放送、動画の活用等により、子供たちの学習機会の保障」
 - ・「学校は、全ての子供たちが安心して楽しく通える魅力ある環境であることや、これまで以上に福祉的な役割や子供たちの居場所としての機能を担うことが求められている」（強調は引用者）
- 「ケア」「機会の保障」「居場所」が、重要なキーワード。

中教審もそのことは、答申の中で確認していますが、一層具体化していく必要があるのではないかと思います。その辺りは、あとのシンポジストの堀江先生のほうから詳しい実践的なご提言がありますので、そちらに譲るとします。

4 これからの学校をめぐる諸問題

話を戻して、中教審答申では、もう1つ、学びの環境づくりについても、これからのICT教育の充実、それから、GIGAスクール構想ということで述べていますが、ここでも、やはり権利主体としての子どもの尊重ということが、当然のこととはいえ、非常に重要であると思います。そのことに対する言及が、必ずしも答申の中で見られないという点に、留意しておく必要があるのではないかと思います。このGIGAスクールもそうです。コンピューターを使って、いわゆる全国一斉学力学習状況調査も継続するとしています。

それから、幼稚園からのPDCAサイクルを徹底していくということをいっています。皆さんは、どのようにお考えでしょうか。学校教育のデジタル化に名を借りて、幼児期から子どもたちを、学習履歴、あるいはキャリアにつながる経過の記録等々という名目で把握していくということは、もちろん積極的な意味もあるけれども、早くから一人一人を把握し、国の人材輩出のための準備をしていくことにもつながっていく局面があることを、

見落としてはならないと思います。

エビデンスの問題も、教育の問題としては、そう簡単にできることではないということです。

それから、ぜひここはお伝えしたいのですが、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の改訂版が昨年出ましたが、その翻訳をされた浅井春夫氏らがおまとめになった序文の中で、「科学的」ということについて言及されています。

今、学校現場がエビデンス、あるいは根拠を示せということで、大変ご苦労があると思います。しかし、ここで朱書きで引用しましたように、「科学的」というのが、そのような「数値によって明らかにされたもの」だけではなくて、「教員と生徒との相互作用」など、短期であれ、長期であれ、そのような教師と子どもの経験の「観察とその分析」によって見いだされる「子どもたちの変容」ということも含むのだということです。

これは、人文、社会科学系からのアプローチを前提とした「科学的」ということの意味かと思えますけれども、私は、これは教育という営みを考えていく上では、非常に重要ではないかということ強調しておきたいと思います。

それから、学校外の問題としましては、学童保育の立場からも、「子どもがいる時間だけの預り事業」としてだけではなく、「保護者の働く権利を守る」場としても、学童保育の役割が再認識できたとおっしゃっています。

5 コロナ禍で「3つのC」が活かされる指導

それから、視点を変えて、やはりアメリカも非常に人種差別の問題や競争格差の問題で、学校現場は大きな課題を抱えています。そのような中での改革論の一つとして、ジェーン・マーティンさんが、スクールホームという問題提起を、早くから、1990年代ですけれども、されています。その中で、「3つのC」ということを提案されています。ケア(care)、コンサーン(concern)、コネクション(connection)の頭文字から来ています。

ケアというのは、一人一人の子どもに接する際の、まさに一人一人を生活主体、発達主体、権利主体として尊重して接するということです。それから、コンサーンというのは、その子どもたち一

人一人の変化に関心を払うということです。それから、コネクションというのは、対人距離を取っていても、教師とつながる、あるいは子ども同士がつながる、そのような多様な場面や活動をつくるということです。これは、私が今の状況に翻訳して述べた文言ではありますけれども、そのような「3つのC」ということが大事ではないかと思えます。

これは、レジュメに新たに追加したスライドです。元資料には入っていませんが、この書籍（Jane Roland Martin: *The SCHOOLHOME*, Harvard Univ. Press, 1995.）がこれです。その中で、マーティンさんは、学校における domesticity、domestic の名詞形ですが、「家庭的であること」、あるいは「家庭性」と、なじまない言葉が出ましたけれども、そのような問題提起をしています。つまり、学校空間を、つながる社会にしていき、学校の生活化というものを目指していくということです。

なぜそのようにするのかということは、やはり先ほども言いましたように、苦痛を伴う学習は、努力して乗り越えて一定のアチーブメントを達成していくという、そのような競争的な環境を変えていかななくてはいけないということを言っているわけです。そのようにすることによって、この「3つのC」を取り入れることで、whole child、ひとまとまりの子ども、あるいは日本的な言い方であれば、一人一人の子どもを丸ごとの存在としてつかむということを、学校の中で、より明確に実現していけるということです。

6 コロナ禍で unlearning への問いかけ

それから、教育史がご専門の佐藤広美さんの論考の中で、このような事例が紹介されています。兵庫県の小6の女子が、担任の先生とのやりとりの中で、人が死んでいるのに、塾ではオンラインで授業が進んでいて、私の受験だけがやってくるというのはおかしくないですかと問いかけているわけです。つまり、彼女なりに、このコロナ禍で学ぶことの意味、恐らく私立中学に向かって勉強してこられているのでしょう。受験するための勉強をすることの意味は何かということ、問い直

し始めているわけです。

ここには、私なりの視点では、ジュディス・L・ハーマンが『心的外傷と回復』の中でいいました、脱学習、アンラーニング (unlearning) というものへの問いかけ、つまり、自分が当たり前のようにたどってきた、この女子の場合であれば受験準備というものを、一体それは何のためなのかと、距離を置いて対象化して見ようとする、あるいは見るような立場に立ってきた。これが、コロナ禍の中で子どもたちの中に生まれている、学びとの向き合い方の一つでもあるということです。

私が仕事をしています愛知の例でいえば、児童虐待の対応件数は、明らかに19年度と20年度の1月期から6月期の、ちょうど全国的にも感染者が増えていった時期で比較すると、幼児期に当たる2歳のところ、思春期の16歳で明らかに増えています。それぞれ発達の不安定さや、あるいは思春期であれば、もっと精神的な意味の不安定さが伴う、その子ども期を、彼や彼女なりに生きている。その様子が、ここにもうかがい知れると思います。家庭の中で、家族環境の中で、逆に、それが揺らがされた、あるいは脅かされたということだと思います。

資料には、さらに18歳意識調査（日本財団）の例も挙げておきましたが、ここはあとでご覧ください。要するに、コロナ禍での学習環境において差があるという若者たち、それから、進路を相談できる相手について、8割近くは「いる」と答えていますけれども、しかし、2割の人は、自分の進路について相談できる人が「いない」と答えています。

この辺りに、やはり若者における自分の将来展望、進路選択における身近な信頼できる他者とのつながりという問題が、社会に対して投げかけられているということです。以上が、学校教育というものが、このコロナ禍の中で、どのように浮かび上がってきたか、そして、何よりも子どもたちの生活においてどのような変容が生まれているかということの一端です。

II 支援とケアについて

1 発達を支援するとは

さて、後半では、今回のテーマに迫っていく意味で、支援とケアの在り方を中心に述べていきたいと思います。まず、発達を支援するとは、どのようなことでしょうか。私はこのように捉えます。子どもの発達を支援するとは、子どもにとって共感的で共生的な他者としての役割を、私たちが果たしていくということを意味するということです。つまり、支援する人は、支援を受ける人にとって、意味のある他者として登場するということです。

あとですぐに述べますが、この他者、アザー（other）というのは、一人一人にとって、あるいはグループにとっても、意識する対象、あるいは自分たちとは別の主体を指しているわけです。この他者の視点から見たときに、支援というのは、支援するものが支援されるという、相互嵌入（かんにゅう）と言いますが、相互に関わり合っているわけです。これは、あとでもう一度論じます。

2 コロナ禍のアザーリングという生き方

私がキーワードにしたいのは、今言ったアザーの、元々動詞形はないのですが、アザーリング（othering）という視点です。つまり、自ら相手にとっての他者の役割を引き受けていく、そのような意味のアザーリングという視点を、今回の「つながる」ということに関わって、見ていきたいと思います。それはどのようなことかということ、実在の他者、家族や友人、あるいは教室などの、そのような関係性を介して、その他者に承認されている自分を知ることが大きな原点になるわけです。

コロナ禍では、それが狭められて、自分自身のアザーリングの時、場、関係、そのようなものが、非常に不安定になっています。先ほど冒頭で、コロナ禍とは、という捉え方のところで、関係性の不安定さ、不確かさをどのように生きるかということが、現実私たちに問いかけている問題ではないかと述べました。その一つの重要な視点が、このアザーリングということではないかと思っています。

アザーリングというふうに、ing で動的に表すというのは、意味があります。つまり、他者に認められる、その自分が誰かの他者になり、多様な個人と交流して、社会に参加して認められる、そのような経験をつくり出していくわけです。

その辺りは、あとで中村先生のほうから、バイオレンスに伴う対人関係の病理的な問題のご報告があるかと思いますが、やはり子どもたちも、それから私たちも、他者との関わりの中で自分を見つめ直すと同時に、自分が身近な相手に対して、どのように他者として登場していくかという、そのようなテーマ性を、このコロナ禍の中で経験しています。今まではそれほど、そのようなことを意識しなくても、おしゃべりしたり、楽しく遊んだり、活動に参加する中でできたのですが、それができなくなり、3密を回避しなくてはならないという形で、個と個が物理的にも距離を取るのに伴って、今言いました、他者との関係性というものが、一層大きく目の前に表れてきたわけです。

コロナ禍のアザーリングという生き方

◆みずから、相手（またはグループ）にとっての他者の役割を引き受ける。これが「支援」の始まり。

「他者」(other)となる othering (アザーリング)

参考：折出『市民社会の教育～関係性と方法』創風社。

◆実在の他者との関係性を介して、他者に承認される自己を知る。

コロナ禍ではそれが狭められ、自分自身のアザーリングの「時・場・関係」が非常に不安定になりがち。

《他者に認められるその自分が誰かの他者になり、多様な個人と交流し、社会に参加し認められる》経験を、多様に創り出すことが、コロナ禍で孤立化しないために必要。

参考：折出『他者ありて私は誰かの他者になる』ほっとブックス新栄。

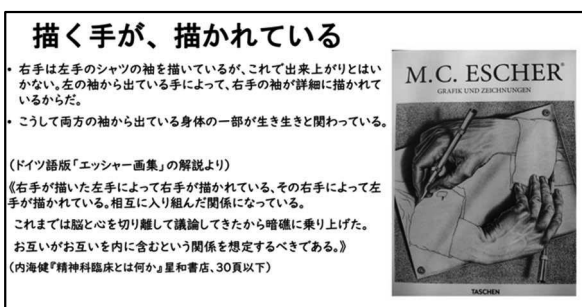
これは資料に入っていないんですが、なぜ私がアザーにこだわるかということ、実は教育学の卒論で、無謀にも、哲学者ヘーゲルの『精神現象学』というのを取り上げて、もう四苦八苦してどうにかまとめたのですが、そのヘーゲルの哲学の重要な概念は、ドイツ語でいうネガチオン (Negation)、否定です。それを、ずっとこだわって探っていくうちに、海外のヘーゲル研究者たちの論文を、これも私なりに読んでいく中で、否定というのは何もない、ナッシングではなくて、他であること、あるいは他となること、今とは違う、他となること、アザーリングなのだというのが、きちんと説明の中に出てくるわけです。なるほど、これだと思ったわけです。これが、やはり教師と子どもの相互

的な行為においても、非常に原点になる概念ではないかと思えます。

この自己と他者というのが、アザーリングの視点を持ち込むことによって、すっぱりと区別して捉えるのではなくて、先ほど言ったように、相互に関わり合う、つまり自己は他者、言い換えれば、それは非自己ですけれども、それによってつかまれている、あるいは支えられている。だから、支えているはずの自分もまた相手に支えられているという、そのような相互嵌入の関係性こそが、このコロナ禍の中で私たちが向き合わなくてはならない、ひょっとしたら新しい社会的な関係性として、今、目の前に表れているのではないかということをお願いいたします。

そのことをくっきりと描き出してくれているのが、エッシャーという有名な画家の描いた、描く手が描かれている絵画です。ご覧になった方もいると思います。右手が左手のシャツの袖を描いて終わったかと思うと、その右手も、実は左手によって描かれているという、このような構図になっているわけです。

これは、内海健さんという精神科医の方が、エッシャーの絵を通して、脳と心の関係の相互嵌入というものを論じておられる著作から引用しておきましたけれども、自己と他者、あるいは自己と非自己との関係性というものも、このエッシャーの絵によって非常にリアルに出ていると思います。



3 支援とは

さて、では支援とはどのような働きかけとして捉えればよいのでしょうか。支援は、あくまでも当事者を主体として、その行為、行動ならびに考え、あるいはその当事者の自己決定を支え、助けることと押さえておきたいと思えます。ですから、ただ子どもを見守ることではなくて、また、

指導の後退や否定でもないわけです。対象とする、その相手の人に伴走する、あるいは並走するというふうには、これは例え的な言い方ですけれども、つまり、そこに他者として登場していくことによって、自己決定性の主体として相手を尊重しながら関わりをつくっていくと、これが、支援という関係の本質ではないかと思えます。福祉や介護では、それはもう至るところに表れていると思いますが、実は教育実践でも、基本は同じだということです。

4 ケアを考える

その中で、ケアというものを考えていきたいと思えます。ケアについては、いろいろな論者が論じていますけれども、ミルトン・メイヤロフのケア論が、オーソドックスなケアの捉え方をしていると思えます。「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が自己実現をすることを助けることである」と、そして「他の人々をケアすることを通して、他の人々に役立つことによって、ケアする人は、自身の生の真の意味を生きている」。メイヤロフはアザーリングうんぬんということは一切言っていませんけれども、実はアザーリングの中身をここで述べているということでもあります。

それから、また、ケアにおいては、指導以上に感性というものが大きく関わってきます。相手の身になって想像を働かせるということ、それが、相手のことを自分のことのように、感情が湧き起こるような、そのようなリアリティーを伴ってくるということです。だから、ここに、具体的にケアの現場でご苦労なされ、それからご自身の役割を問い直しながら活動されている方々は、そのリアリティーの中に、ご自身の生きる意味、あるいは他者とつながる意味を探っておられるのだと思えます。その問いがある限りは、その方々は、お一人一人が、やはり優れた素晴らしい実践主体として頑張っておられるのだと、私は受け止めたいと思えます。

文学評論家の小林秀雄さんの「良心は感受性を持つがゆえに、皆ひそかにひとり悩む」の言葉も、中国の孟子の言葉「心の官」を引用して、古臭く

は感じられるかもしれませんが、非常に、今言ったことを端的に言っているわけです。

では、そのケアの体験の当事者の事例の一つとしまして、ラジオ番組でのお2人の対談です。最首悟さんという、お嬢さんが重複障害児でいらっしゃる、この方と、ジャーナリストの渡辺さん、筋ジストロフィ患者の福祉的な支援に実際に参加して、そのルポルタージュをまとめた著者が対談されたことから学ぶことを挙げておきました。

ここは、またあとでごゆっくり資料を読んでいただければと思いますが、その中から私が得たことの一つは、自立は同時に依存でもあるのだ、そうではないかということです。例えば、筋ジストロフィ患者である鹿野さんの支援に携わった渡辺さんは、鹿野さんは、自分の身体を提供してボランティアに支えさせてあげているのではないかと思うような場面がいろいろあったということを述べています。

まさにこれは、先ほどの、右手と左手の相互嵌入を描いたエッセイの表している関係性に当たると思いました。そして、同じく渡辺氏の言葉ですけれども、「人を支えていると、自分が支えられていることに気付く」、誰かを支える、その自分の私的なものは、そこで生きてくるということを言っています。

これはどのようなことかという、同じケアに参加した、ある法学専攻の学生さんが、このボランティア体験を通して医学部に入り直した、それから渡辺氏自身も福祉を考えるようになったということ、その対談の中で語っておられます。

私の見方ですけれども、ケアをする人は、臨床の現場においてはケアテーカーともいわれますけれども、ケアを受け取ることも意味するわけですから、ケアを提供し、そしてケアを受け取る人、いずれもがケアテーカーとして関わっています。だから、ケアし、ケアされる関係性そのものが、そこに一つの、先ほどの、自己と非自己の相互嵌入の、そのような場面をつくり出しているということです。

もう一度言いますが、ケアする人とケアされる人とが、する者、される者というふうにして、2項の関係、2者の関係で区別されるのでは

なくて、一つの、そこに場面性といっているのでしょうか、個と個、あるいは個と複数でもいいのですが、複数とグループでももちろんいいのですが、関わり合っている一つの場面性というものが、それぞれの生き方の相互嵌入の生み出した世界として、そこにつくられているということ、ケアの問題としては見ていく必要があるのではないかと思います。

最首さんと渡辺さんの2人の対談から得たことを、短くまとめておきます。1つは、ケアは双方向性、相互性を持つ働きかけであるということです。先ほど引用したメイヤロフも述べていましたように、ケアの、やはり基本的なテーマは相互の成長であり、相互関係を意識した言葉だと思えます。

相互性や双方向性、そのようなものは、およそ当たり前ではないかと思われている方も、この参加者の方が多いかと思いますが、それは、当たり前は当たり前でしょう。しかし今、このコロナ禍の中で私どもに問われているのは、そのような相互性を具体的な場面で表現し、そして相手のそのような表現も自分が受け止められる、そのような他者として、私がどのように登場していくか、あるいは、そのような他者としての役割を、この目の前の子どもたちなり、あるいは、援助を必要としているニーズをお持ちの方に、どのように私たちが表していくか、そのようなことはやはり具体的な実践の問題としては問われていると思えます。

そこに、やはり難しさはあるけれども、常に関わり合いの中から新たなヒントが出たり、あるいは、今までは自分が気付かなかったことを相手に示唆されたり、あるいは、逆に先ほどの、患者支援のボランティア体験の中でも語られていたように、まるで自分が支援する、その支援というものが試されているかのような、そのような関わり方という形で、ケアする者がケアされていく。そのような面も、併せて見ていく必要があると思えます。ですから、ケアは関係性や他者、自立と依存というものと深い関係にあります。

それから、教育は元々ケアというものを内在させているのではないかということで、これは言葉の問題ですので、スルーしますけれども、またあ

とで読んでみておいてください。

小括

①二人の対談から、ケアは双方向性・相互性をもつ働きかけを指し、臨床哲学のM.メイヤロフも述べたように、相互成長であり、相互関係を意識した言葉だと言える。

②ケアは「関係性」「他者」「自立と依存」とも深い関係にある。

③ケアしケアされる関係自体が、広義の教育的価値を持っている。

④「教育」は「ケア」を内在させている。

「教育する」の英語education はラテン語の educare「(栄養を与え)養う」に由来し、nurse の語源とされるラテン語 nutrire と同じ意味だとされている(白水浩信論文:北海道大学院紀要所載より)。

注記:「語源から学ぶ英単語」サイトでは、nurse は ラテン語 nutrire(栄養を当てる)から来ていると述べている。

5 コロナ禍で「つながって生きること」とは

さて、コロナ禍でのつながり合いや出会いというものをどのように受け止めればいいのかということです。ご参加者の中には、先ほどのフォーラムでのご報告の、現場の先生の報告も少しお聞きしましたけれども、教育現場で日々頑張っておられる方々は多いかと思えます。子どもたちとの日々の出会いをどのように受け止め、また意味付けてきているのでしょうか。

いろいろな視点があると思いますが、ここでは、昨年の9月にお亡くなりになられた、教育学者の竹内常一氏の、ある視点を引用しておきます。つまり、もちろん、出会いというのは、お互いに顔を合わせて認知し合うということなのですが、特に生活指導や生活教育など、子どもの生活に関わって実践をしていく場合には、子どもが変わっていく時の、そのような、先ほど言いました場面性、子どもが変わる、あるいは変わろうとしている、変わっていつている、そのような時の出会いというものを、どのように私たちが受け止めていくかがテーマになると思えます。

竹内氏は、そこで、そのような「子どもが変革していく時の出会い」は、お互いに顔を合わせて認知し合うということ以上に、「呼びかけと応答にはじまる」、そのような関係を持っているのではないか。その意味で、お互いの「相互応答」、あるいは「対話」というものを意味しているのではないかと述べています。

これは、子ども同士の中でも、例えば学級の行事的な活動の中で、ある役割をめぐって意見がぶつかったりしたときなどに、そのような場面があるでしょうし、私が最近出会った例では、小学校

5年生の男の子が、何かがあるとすぐに「死ね」と言う、その「死ね」というのが、何を思ってそのように言うのかというのを、担任の男性の先生も、最初は、少しかりかりするのですが、次第に、その子どもの「死ね」ということの意味を聞き取っていくようにします。そして、その子のいるグループの中でも、みんなはどうかと投げかけると、やはりいらいらしたり、何か自分のことを受け止めてもらえていないときには、「死ね」という言葉を俺たちも使うということが語られて、そして「死ね」ということ自体を通して、その子どもを排除するのではなくて、みんなが抱えているいらいらやもやもやが、では何から来ているのかということを話すように変わっていくわけです。

そうすると、そこには、「死ね」ということをやめなさいと押しえつけるのではなくて、そのことを意識化することによって乗り越えていこうとする子どもの変容が生まれてきます。現に、その実践の中では、その子がいらついたときに、「死ね」という文字をプリントに書くことによって、自分なりにコントロールするような場面も、あとには出てきていました。

もちろん、ここでは、竹内氏がいつているのは、担任である教師が子どもに呼びかけ、そして子どもからの応答に、また教師がそれに応えていくという、そのようなスパイラルの関係性を言おうとしているわけです。

このスライドの後半に書いていることも、今述べたようなことです。要は、もう一度述べますけれども、一人一人の子ども自身が当事者であって、その当事者から、今度は、その子ども自身が自分の困難さを意識して、それに向き合い、それを乗り越えていこうとする、その関係性をどのように作り出すかということが、ここでの、出会いにおける対話の持つ意味だとして、私は竹内氏の、この問題提起を大事にしたいと思っています。

さて、では、コロナ禍でつながって生きることとはどのようなことなのだろうかということです。やはり、それぞれその人の生存理由というものがあると思います。かけがえのない他者、信頼できる他者がいるということ、つながることが生きがいになるということ、これが、やはり子ども

もや若者や大人においても共通に、生きがいの源泉や対象としての信頼できる他者であること、あるいはそのような他者にめぐり会えること、あるいは生きがいを感じる精神状態、生きがい感をつくり出す、そのようなつながりや、その活動があるということです。つまり、生きがいを生み出す、この場合は人のことを話題にしていますので、そのような対象としての他者、生きがいを感じさせる、具体的なつながりや活動、このような両面から、生きがいの問題を見ていくことはできると思います。

神谷美恵子氏の有名な『生きがいについて』も参考にしました。今回のコロナ禍との関わりが背景にあるのではないかと思われる、ちょうど最近発表されたばかりの、子どもたちの自殺の状態も、ここでいう、その子どもなりの生存理由というのが脅かされ、あるいは自分にとっての居場所、所属感というものが失われるという体験が、一つの大事な要因として背景にあったのではないかということがうかがえます。それはあとで、すぐに資料をアップしますが、一通り、この話を続けていきます。

支援やケアにおいても、要するに、相手に働きかけることで働きかけられる、そのような作用がそこにあります。働きかける者が働きかけられるということが、支援やケアの中では、やはり一層浮かび上がってきます。元々教育における指導というものは、そのような側面を持っています。

ところが、私が仕事をしている分野の、生活指導論、生活指導研究の中でも、やはり指導というものを、教師の主體的な営みと捉えて、教師の指導構想の下に、どのように子どもたちを参加させていくかという、そのような教師主導的な見方で指導を捉えている例もないわけではないのですが、先ほどの竹内氏がおっしゃったとおり、教師は呼びかけていて、子どもからの応答を受け止めながら、それにまた、教師がどのように応えていくかということの中に、実は、元々持っていた権威的な、あるいは権力的なものをバックにした指導そのものが相対化されざるを得なくなっていくわけです。そこで、教師は改めて指導とは何かを学び直し、そして、次の一步を踏み出していくわけで

す。その意味では、やはり、そこにも働きかける者が働きかけられるという相互作用性があるわけです。このことが、すごく大事だと思います。

話を戻して、支援やケアにある、そのような相互作用性というものを基にして生きがいというものを考えていくときに、生きがいの特徴として、ここに挙げたような5つのことが上がってくるのではないかと思います。

生きがいの欲求とその充たし方

◆「支援」にも「ケア」にも、相手に働きかけることで働きかけられる作用があり、それが「生きがい」の源泉になっている。

◆「生きがい」を日々抱く人→自分のtaskmaster(課題を与える人または事柄)をもっている。

・「生きがい」の特徴

①ひとに生きがいを与える。

②実利実益を優先しない。

③やりたいからやるという自発性。

④個性的:自分にぴったりしたもの。

⑤のびのびと生きていける。その人独自の心の世界を創る。

コロナ禍でつながりを失った人にとっては、自分の存在は誰かのために必要だということを強く感じさせるもの、あるいは、その出会いを求めています。それを共同でどのように見つけ、つくり出すかということです。

実は、私自身は、愛知の私立学校の保護者たちでつくる父母懇談会の役員をしているのですが、そこでのことです。いろいろな行事が今までどおり通常どおりある中では、皆さんは明るく笑顔で頑張っていて、はきはきとしてやっておられまして、そのようなものがコロナ禍でほとんど全部が中止になったときに、改めて自分たちのコミュニケーションというものの弱さやもろさ、伝わっているはずが伝わっていない、あるいはあちこちで話のねじれが出てくるといふことにぶつかの中で、改めてお互いの役割、お互いに出会うことの意味を問い直し始めています。大人の世界でも、そのようなことがあるということですから、子どもたちにおいてはなおさら、それは難しい、生きる上での生きづらさとして生じていることは、十分に予想されます。

しかし、このような苦しみを抱える中でも、他者に打ち明けることによって、それがいくらかでも軽くなっていく面があります。これは、先ほど引用した神谷氏も述べておられることですが、そのような苦しみの感情を概念化するという

ものも含まれている面があるかと思います。それから、家族問題、家庭問題として、幾つか上がっています。

このように分類はされますけれども、結局自らの命を絶つに至った一人一人にとっては、先ほど言ったように、この、生きることの意味、特に下のほうに書きましたように、自分にとって安心できる他者、あるいは自分たちの生活の営みを承認し、保証してくれる、そのようなコミュニティとのつながりということが、やはり根本には、子どもたちの世代にあるということが、今の自殺の増加のことからもうかがえると思います。

なかなか、このような根本的かつ大きなテーマは、簡単にまとめることは本来できないのですが、これからの、あとの議論の一つの入り口として、私なりのまとめをします。

1 つ目は、やはり、さまざまな弱さや不完全さはあっても、その弱さやもろさも抱えたひとままとまりの人間性、個性を持って、子どもたちも、それから教育関係者である私たちも、また社会的な支援をされている方々も、ここにいます。今、ここに生きている私たちが、自分たちそれぞれの命をどのように表現し、そして、命を表現する者同士として他者を認め、自分も他者に関わっていく者としてどのように登場していくかという、何度も言いますが、相互嵌入の、目には見えないですけども、相互に、言い換えればエッシャーの描いた右手と左手のような、そのような関係性をどのように受け止めていくかということがあると思います。

ただ、それは、他者、この良きものではありません。やはり先ほどの、学校が再開の6、9月、それから短縮夏休みが明けた8月の時に、ぐっと自殺が増えているということは、学級集団に出会うときの、その困難さというものが背景にあるということもうかがえます。精神科医の斎藤環氏は、ラジオのインタビュー番組の中で、そのような、夏休み明けの時に、とにかく他者と出会うこと自体の持つ暴力性というものがあるのではないかと、それによって恐れ、そして怖さを感じるという子どもがいるから、そのような子どもたちは、引き続き学校に行かなくて、オンラインならオンライ

ンで学びができるような、そのような場を保障してあげることも大事だという趣旨のことを言っていました。

だから、他者、この良きものではなくて、関わり方によっては、他者もまた攻撃性を持つ、あるいは当人に恐れを抱かせる、そのような存在として登場するということは、もちろんあり得ます。ただ、大事なことは、それが無自覚に、無意識に行われていく、あるいは自らの権威や、自らの立場や地位というものを当たり前のようにしてしまっていて、それを言動に表してしまうがゆえに相手を攻撃し、傷つけてしまうという、そのような問題については、やはり、この相互性といいたいまいしょうか、そのようなものを一つの軸として、自分の足元を見つめ直すことが、今問われているかと思います。

その意味で、そのような、自己と他者との関係性を担い、それを表現していく主体として、特に私たち大人は、絶えず自分を捉え直し、また、そのような場面に入ってくる若く幼い発達主体として、子どもを受け止めていく。ですから、暴言を吐いたり、いろいろとこちらをかりかりさせたりすることもあるでしょう。けれども、そのことに対して、やはり、例えば、ある中学校の女性の担任の教師は、何かあると「うぜえ」や「死ね」など、暴言を教師にまでぶつけてくるときに、あえて手で、このようなハートマークを描いて、そして、子どもに対応していったという例も報告されていますけれども、それは一つのスキルではありまじょうけれども、決してその場しのぎのものではなくて、あなたたちの暴言を、そのようには受け止めないで、もっとそこには何か込められたものがあるはずでしょうという、その、含みを持たせた応答をしているということです。

以上、長々と話してきました。準備の打ち合わせでは、50枚近くのスライドをどのようにするのだという、主催者の春日井先生辺りにご心配をかけましたけれども、途中でスルーした内容もありましたけれども、申し上げたかったことは、要するに、コロナ禍の中で浮き彫りになっているのは、感染のリスクとともに、私たちの関係性の不安定さ、この不確かさをどのように生きるかという、

この難問があるのだということです。

まとめ

- ◆一人の人間として生まれ生きていくうえで、様々な弱さや不完全さはあるが、その総体の人間性（個性）をもって自分はどのように自己のいのちを表現し、発展させていくか。
- ◆その主体であること、これを目標とする考え方・生き方がヒューマニズムで、ケアの要である相互性は、そのもっとも重要な価値である。
- ◆いまコロナ禍で、私たちは試されています。一人ひとりがこの先の見えない困難な中で、どれだけ「生きること」「つながること」「支え・支えられること」を大事にし、愛おしむかを。共に、顔をあげて一歩一歩踏み出していきましょう。

そして、難問があるということは、その問いを正しく立てれば、それは解けていくので、そこに積極性、つまり否定的な状況の中に、必ず肯定的な要素があるということ、この考え方が、今「つながって生きること」にとって大事ではないでしょうか。そのときのキーワードとして、私は、他者と共に生きる、自分がそのような表現者や主体者としてどのように登場していくかという意味で、きょうは「アザーリング」という言葉を使わせていただいたわけです。

どうも長時間、ご清聴をありがとうございました。ちょうど持ち時間になりましたので、これで終わります、ありがとうございました。